

中国近代史学論文選訳注（続）

—夏曾佑『最新中学教科書中国歴史』（抄）および他一篇—

名古屋大学東洋史研究報告 四十五号 二〇二二年三月発行

土屋 沈育 曹純 趙文 岸明 史純 甫 音 洋

はじめに

二〇世紀初頭、変革の聲が高まる中国で、新たな「中国史」を提起し、「一族の家譜」ではない「国民すべての経歴」を描くことを求めたのは、他でもなく、梁啓超であった。^①その彼をして「清末における思想革命の先駆者」と言わしめ、^②中国人の手になる最初の「中国史」と称しうる『最新中学教科書中国歴史』を著したのが夏曾佑である。^③

夏曾佑（一八六三—一九二四年）、字は穂卿、号は碎仏、浙江杭県の人。父は有名な算学家。つとに父を失ったが、幼い頃から学問を好み、思慮深かった。二八歳で会試に合格して進士となり、礼部主事を授けられた。読書をする際は、数十冊を机にならべ、一兩日で読破したという。一八九三年から九四年にかけて公羊学が流行し、梁啓超、麦孟華らは常に夏曾佑に公羊学を語ったが、自ら公羊学者を任ずることはなかった。九五年に上海で同郷の汪康年や梁啓超が『時務報』を創刊すると、彼もそれに関わった。一八九六年から

九七年にかけて、天津の育才館で教鞭を執るかたわら、嚴復、王脩植と親しく交わり、彼らが創刊した『国聞報』に参加した。嚴復が訳した『天演論』、『原富』等は夏曾佑と繰り返し相談して篇を成したものである。一学生問を講じ、学派の異同による私心は無かった。一九〇〇年以降、安徽祁門県知県、直隸州知州に任用され、五大臣が東西各国に赴き憲政を視察することとなると、夏曾佑も随行して日本を訪れた。民国成立後は、上海に退き、ついで教育部社会司長、北平図書館長の職を担った。晩年、門を閉ざしがちとなったが、教えを乞うものがあれば、ていねいに導いたという。遺文二百余篇、遺詩百余首のほか、『中学歴史教科書』を著した。一九二四年三月十五日卒、享年六二歳。没後、郷里の杭州西湖ほとりに位置する韜光寺に葬られた。⁴

本稿は、夏曾佑が公刊した唯一の著作である『最新中学教科書中国歴史』（以下『中国歴史』）について、同書の導入・総論部分にあたる「叙」から「凡例」、第一篇「上古史」第一章「伝説時代」第一節「世界の初め」、同第二節「地の各州、人の各種」、同第三節「中国種族の起源」（抄）、同第四節「古今の時代変化のあらまし」、同第五節「歴史の益」までを取り上げて、訳注を施し、紹介するものである。一体、

中国人の手になる最初の「中国史」はいかなる書物であったのか。その一斑を窺いたい。また本稿は、同時期に彼が著した日中関係を論じる代表的論文「中日離合の関係を論ず」についても、訳注を施し、紹介するものである。楊琬編『夏曾佑集』が出版されてより、彼の活動の全体像を窺うことが容易となったが、⁵そこには少なからぬ日本を論じた文章や日本人との関わりを示す記事が見えた。果たして、夏曾佑は日本といかなる関係を結んだのか。この当時、那珂通世『支那通史』（一八九〇年）、桑原隲藏『中等東洋史』（一八九八年）が中国に将来されていたが、これら日本の「支那史」、「東洋史」と夏曾佑『中国歴史』との関係も併せ考えながら、その一端を窺いたい。

第一章に示す『中国歴史』は、編輯者錢塘夏曾佑、校閲者・発行者商務印書館、第一冊が光緒三〇年（一九〇四年）八月初版、第二・三冊はそれぞれ翌年・翌々年に出版された。第四冊以降はついに執筆されることなく、記述は隋代までで中断している。しかし、この書はこのち蔡元培や梁啓超の評価を得て、⁶一九三三年には『中国古代史』と改題されて商務印書館の「大学叢書」中の一冊として再刊された。この再刊に際しては、錢穆が「学者がこの書を読んで、利益がある

とすれば、この書が今日なお廃刊できないこと（「がわかること」）である」と述べ、「中国通史要略」で知られる繆鳳林もまた、この書が「大学叢書」として再刊されたことは、「史学界の一種の不幸」と述べた通り、誤りも多く、陳腐化したこの書がなお再刊されることを悲嘆する声も上がっていた。しかし、このうち、経学史家として知られ、夏曾佑に注目した周予同は、『中国歴史』が康有為『新学偽経考』、『孔子改制考』に代表される今文経学の影響を受けてはいたものの、夏曾佑自ら『中国歴史』中「その意図は清朝の諸々の経学の師とはやや異なる。およそ経義の変遷は、みな歴史の因果の理によってこれを解し、専ら経書を講じることではない」と述べていた通り、彼はすでに「今文学者」から「新史学家」に転じていたとし、『中国歴史』の画期性を評価したのであった。⁹つまり、『中国歴史』は伝統的な経学の枠組みから一歩足を踏み出し、因果関係に基づく社会進化論の観点から新たな通史を描こうとした「新史学」の最初の試みであった、というわけである。この書に対するこのような評価は中華人民共和国建国後も大きく変化することなく、同書は数度の復刊を経て、今日すでに古典としての地位を獲得したと云ってよいだろう。なお、この『中国歴史』については、す

で井澤耕一氏による訳注が公表されており、本稿の紹介は屋下に屋を架すものである。とはいえ、本稿では夏曾佑の他の一篇も併せて訳出し、日本との関係を述べることにやや意を用いることで、大方の諒を乞いたい。

第二章に示す「中日離合の関係を論ず」は、『東方雜誌』第一年第一期（光緒三〇年（一九〇四年）正月二十五日）、すなわち商務印書館の看板雑誌創刊号の巻頭社説として掲載されたものである。¹⁰署名は夏曾佑のペンネームである別士。日露の開戦後まもなく発表されたこの一文は、太古から近代に至る日中の交流史を論じながら、当時、戦場となりながら局外中立を宣言していた清国政府に対し、日本支持の政策を打ち出すよう力強く訴えたものである。『中国歴史』執筆当時の一九〇三年から一九〇五年にかけて、夏曾佑は同郷の汪康年が創刊した『中外日報』の主筆として連日のように時事を論じていたが、そこで議論の一つの中心となったのが日露戦争に関連した日本論であった。この「中日離合の関係を論ず」は、これらのなかでもっともまとまったかたちで彼の日本論を提示するものである。ここに見える通り、夏曾佑は日中の提携を力強く呼びかけ、その主張は日露戦争期間中は揺らぐことがなかったが、こうした彼の主張の背後には、

他でもなく、彼のアジア主義的思想が存在していた。すなわち、ロシアによる東三省占領によって列強による中国「瓜分」が現実味を帯びるなか、同じ「黄種」である日本と協力し、中国も日本同様「立憲」によって自強することで、ともに西欧列強に立ち向かう、とする思想がそれである。そして、こうした彼の思想は、日本人との交わりを通じて育まれたものに相違ない。夏曾佑の日記を通読すると、彼が一八九七年頃から日本人と頻繁に往来していたことが窺える。また、彼は日本人とともに天津興亜会の設立にも深く関わっていた¹⁴。この他、彼は日本語も解したようで、日本語の書籍や新聞に普段から接していたようである¹⁵。

それでは、このように日本との関係を有した夏曾佑の『中国歴史』と日本の「支那史」、「東洋史」とはいかなる関係にあったのか。この問題については、かつて『中国歴史』を評した識者たちのあいだでも一つの論点となっていた。上述の繆鳳林は、『中国歴史』の「漢地理」等の五節はすべて重野安繹『支那疆域沿革略説』に依拠していたが、当時、中国で好評を博していた那珂通世『支那通史』と桑原隲藏『中等東洋史』については、「一字も提起せず、またたしかに引用していなかった」として、『中国歴史』の独創性を評価した¹⁶。

これに対し、上述の周予同は、ここでも異なる見解を示している。すなわち、「夏氏のこの書は、冒頭の何節かで、種族を述べ、時代区分を論じ、それ以下の章と節に分けた構成は、およそ『支那通史』に近く、内容の綿密さでは勝っているものの、体裁について言えば、明らかにこの日本の東洋史学者の影響を受けている」と述べ、内容はともかくも、『中国歴史』のその新たな「通史」としてのスタイルは、那珂通世『支那通史』からの影響を受けていた、としたのである¹⁷。周予同のこの見解も、こののち基本的に支持され、今日に至っていると見てよいだろう¹⁸。なお、夏曾佑『中国歴史』はかつて日本でも出版されたことがあり、どれほどの読者を得たかは不明であるものの、このことは同書が日本の「支那史」、「東洋史」とは異なる独自の価値を有していたことを暗に物語っているように。

本訳注の「はじめに」および第二章は土屋が執筆し、第一章は沈、曹、趙、岸、志甫が執筆し、土屋が加筆修正を施した。また、凡例的なこととして、①底本は第一、二章のいずれも前掲楊琥編『夏曾佑集』を用い、適宜、その他の版本を参照した。②紙幅の関係から原文を掲げえなかったが、重要と思われる箇所については訳注で示した。③訳注中に原文を

引用する際は、常用漢字に改め、句読点を適宜補った。④訳出に際しては、底本の改段落等の一部改めた。⑤原注には括弧書きの注と割注の二種類が見えるが、訳文中ではいずれも()内に統一した。⑥訳文中における訳者による注記はいずれも「」内に記した。⑦訳注に記した人物の略歴で、出典を示していないものは、岩波書店辞典編集部『岩波世界人名大辞典』(岩波書店、二〇一三年)より抜粋した。

注

- (1) 任公(梁啓超)「中国史叙論」(『清議報』第九〇冊、一九〇一年)、一頁。
- (2) 梁啓超「亡友夏穂卿先生」(一九二四年、今『飲冰室文集』第四四(上)、中華書局、一九八九年)、一八頁。また、この梁啓超による追悼文を日本語訳し、詳細な訳注とともに紹介する島田虔次『中国革命の先駆者たち』(筑摩書房、一九六五年)、五一―三〇頁参照。
- (3) ただし、これより先、丁保書著『蒙学中国歴史教科書』(文明書局、一九〇三年)が刊行されている。しかし、同書の巻首には「文明書局編訳」の文字も見える。この書については、鈴木正弘「清末の歴史教科書におけるナショナル・アイデンティティ―丁保書編著『蒙学中国歴史教科書』の考察―」(『歴史教育史研究』第九号、二〇一一年)参照。
- (4) 夏元瑛「夏曾佑伝略」(教育部編『第一次中国教育年鑑』戊

編、開明書店、一九三四年)、四二―一頁より抜粋。

- (5) 楊琥編『国家清史編纂委員会・文献叢刊』夏曾佑集』上下(上海古籍出版社、二〇一一年)。

- (6) 蔡元培は夏曾佑を厳復、王国維等と並ぶ中国哲学の代表的人物として取り上げ、紹介している。蔡元培「五十年来中国之哲学」(一九三三年、今中国蔡元培研究会『蔡元培全集』第五卷、浙江教育出版社、一九九七年)、一二四―一三一頁。また、梁啓超は、夏曾佑が「中国歴史に対し斬新な見解を有した。とりわけ古代史であり、とりわけ有史以前である」と評した。前掲梁啓超「亡友夏穂卿先生」、一九頁。

- (7) 公沙(錢穆)「評夏曾佑中国古代史」(『圖書季刊』第一卷第二期、一九三四年)、七頁。

- (8) 繆鳳林「大学叢書本國史兩種」(『圖書評論』第二卷第八期、一九三四年)、一頁。

- (9) 周子同「五十年来中国之新史学」(『学林』第四輯、一九四一年、今朱維鈺編『周子同経学史論著選集』、上海人民出版社、一九八三年)、五三四頁。

- (10) 例えば、中西の歴史学に通じた斉思和も周子同の説に従いながら、『中国歴史』は「当時の名著として恥じないものであった」と賛辞を惜しまなかった。斉思和「近百年来中国史学的発展」(一九四九年、今「晚清史学的發展」、同『中国史探研』、中華書局、一九八一年)、六八二頁。また、中国における夏曾佑研究を整理した、詹建林「夏曾佑研究之檢討与前瞻」(『湖北科技学院学报』第三七卷第二期、二〇一七年)参照。

- (11) 井澤耕一「夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』訳注」(二、二、二二)、『茨城大学人文社会科学部紀要―人文コミュニケーション学論集―』第一、三、六号、二〇一七―二〇二〇年)。
- (12) この他、『中外日報』、光緒三〇年二月一九日にも掲載された

という。

(13) この当時、彼が往来していた日本人や日本関係の人物は多数にのぼり、草創期の日本語教員であった杉幾太郎、陶大均（杏南）をはじめとして、軍人の瀧川具和、神尾光臣、越山寛、青木純宣、大使館・領事館員であった矢野文雄（龍溪）、鄭永昌、井原真澄、松岡洋右、アジア主義者であった山田良政、井上雅二、『国聞報』の経営者であった西村博、ジャーナリストの川崎三郎、上野岩太郎、漢学者の安藤虎雄、野口多内、内藤湖南、実業家の樋口忠一等の名が見える。

(14) 「天津興亜会序」（前掲楊琥編『夏曾佑集』上）、四九五頁。一八九七年一月に起こったドイツの膠州湾占領事件を契機として、日中聯盟論が日中間で広がり、アジア主義団体設立の動きが各地で活発となった。天津興亜会は一八九八年六月に設立され、川崎紫山（三郎）を中心として、「対清同志在京者の会」が日本側の受け皿になったであろうという。藤谷浩悦『戊戌政変の衝撃と日本―日中聯盟論の模索と展開―』（研文出版、二〇一五年）、三五―一〇一頁。また、夏曾佑に拠れば、一八九七年に矢野文雄（龍溪）が清国特命全權公使に着任して以来、日中聯盟の説がおこり、日中人士間の交遊が密接になったとのことである。「論政府拒俄不必倚頼日本」（前掲楊琥編『夏曾佑集』上）、九二頁、「論日人对中国新意見」（同前）、三三四頁。

(15) 一八九九年九月の日記には、姉崎正治『印度（宗教）史』（一八九七年）、同訳『宗教哲学』（一八九八年）、建部遯吾『哲学大観』（一八九八年）を読んだ、と見える。前掲楊琥編『夏曾佑集』下、七二―四頁。また一九〇〇年の汪康年宛書簡では、『和文字典』の購入を彼に託している。前掲楊琥編『夏曾佑集』上、四七二頁。

(16) 前掲繆鳳林「大学叢書本国史兩種」、一一七頁。なお、繆の師是那珂通世『支那通史』を改編・増補した『歴代史略』（一九〇二年）の編者柳詒語徴である。

(17) 前掲周予同「五十年來中国之新史学」、五三六頁。

(18) 前掲齊思和「近百年來中国史学的發展」、六八二頁。

(19) 夏曾佑『中国歴史教科書』第一冊（金港堂、一九〇五年）。なお、当時、金港堂は商務印書館と合併関係にあった。

一、夏曾佑『最新中学教科書中国歴史』（抄）

叙

人の知恵のなかで未来を知ることより大事なものはない。それでは未来はどのようにすれば知ることができるのか。それは過去の出来事に基づいて推測できるだけである。それゆえに史学は人々にとってなくてはならない学問である。しかし、そうはいっても、ことはそう簡単ではない。

中国^①の建国が古い以上、過去の出来事はやや繁雑である。秦より以前は、歴史の記載が多くばらばらであり、秦より以後は、歴史の記載が多く重なっている。ばらばらのものはほどよいところをとってまとめることができず、重なっているものはえりわけてやることができない。ましてや、史はもともと王朝の官であり、彼らの筆の及ぶところは、たいいてい帝

王に関するにとどまり、世間のうわさ話のたぐいは小官にゆだね、正史がこれを欠いていれればなおさらである。⁽³⁾歴史を研究することの難しさは、ここに見ることができ。しかし、これはなお往時の話である。

今日にいたっては、学問分野は日ごとに増え、忙しくて暇がなく、もはや努力してすべての歴史書を読む時間がない。しかし、時勢の巡り合わせによって、人の世の出来事は刻々と変化している。⁽⁴⁾今日我われが享受している結果について、一つ一つ古人に立ち返ってその原因を検証するのだから、前途の安危を知るすべがない。そうであれば、すみやかに歴史書を読まなければならないのである。それではいったいどうすればよいのか。

そこで一冊の書物が必要となる。その文章は古人より簡明で、道理がかつての書籍より備わっていれば、どれほど社会のニーズに応えることができようか。本書はこの主旨にもとづいたものであるが、学殖も時間もおよばないところがあつり、不注意な誤りに対する批判を免れないことはわかっている。それでもひとまずこの主旨を述べたまでである。

錢唐夏曾佑叙す。

訳注

- (1) 原文は「神州」。
- (2) 原文は「史本王官、載筆所及、例止王事」。「史載筆、士載言」(『禮記』曲禮上)に拠る。この句の孔穎達疏には、「史、謂國史、書録王事者。王若挙動、史必書之。王若行往、則史載書具而從之也」と見える。
- (3) 原文は「街談巷語之所造、属之稗官、正史缺焉」。「小説家者流、蓋出於稗官、街談巷語、道聽塗説者之所造也」(『漢書』芸文志)に拠る。
- (4) 原文は「運会所遭、人事將變」。

凡例

教室での講義は、中国の学問が西洋の学問より難しい。これは西洋の学問には先人の導きがあるのに対し、中国の学問にはそれが無いからである。この書はこの点に鑑みて、引用した書物についていずれもその下に記号を付した。例えば第三節一は、附卷中の第三節(一)を調べると、すぐにその出典を知ることができる。記号を付していないものは、すべて二十四史から引いた文である。この書は二十四史を底本としているため、さらにその出典を示すことはしなかった(正史と他書がいか所に入り混じっているものについては、やはり出典を注記した。一節中に引用が頻繁なものについては、い

ずれも出典を本文の下に注記し、記号を付さず、誤りを減らした。

この書では我が国の古代から今日にいたるまでの事柄を三つの大時代に分け、さらにそれを細分化して七つの小時代とした。⁽¹⁾各時代中の特別な事柄については詳細に記し、普通の事柄については省略した。例えば、古代では神話に詳しく、周では学派に詳しく、秦では政府に詳しいという具合である。その他は類推されたい。

本書中に引用した人名や地名は、それぞれ依拠した書物に従ったが、標題および案語中に見えるものは、最も通行している書物を基本とした。例えば「包犧」の名は『易』のそれを用いた。その他は類推されたい。

古代の地名が今のどこにあるのかは、一語一語その下に注を付し、別に沿革図を付して、明らかにしよう期した。ただし紙幅が限られているため、それぞれの図はあまり詳しくすることができず、往々にして郡はあっても県はない。ただし、今日の地図によつて検証すれば、すぐに明らかにできる。

歴史年表と古人の著述は、史実との関係が極めて密接で、決して省略できないものであれば、いずれも全て付録して、広く参考に供した。

歴史は必ず図画をたよりとするが、中国古代の図画は伝わっておらず、後世の人が補って作ったものは、誰かが作っては誰かが非難し、結局のところ定論が無いため、この書では一概に収録しなかった。

中国の歴史は規模があまりに大きく、慌ただしく編纂したので、漏れや誤りが必ずや多いはずである。再版するときには修正を加えたい。

訳注

(1) 時代区分の詳細は、「第四節 古今の時代変化のあらまし」に見える。

(2) 伏羲のこと。

第一篇 上古史

第一章 伝説時代⁽¹⁾

第一節 世界の初め

人類の誕生は、その始まりがなかったと決していることができない。しかし、その始まりを語る場合、その説はそれぞれ異なっており、およそ二つの派に分かれている。一つは古代に人類の始まりを語ったもので、宗教家である。いま一つ

は今日人類の始まりを語るもので、生物学者である。

宗教家はその教えによつて異なり、それぞれ自らの集団の最も古い書物をたのみとする。世界の古い国々、例えば、エジプト (Egypt)、バビロン (Babylon)、インド (India)、ヘブライ (Hebrew) などは、それぞれ書物を有し、天地開闢のさま、始祖降生のごとに詳しく、その説が今日なお存在していることは現代の学者の知るところである。我が中国もまたそのなかの一つである。各国の所説を顧みるに、一つとして同じものはない。昔の学者は、宗教を篤く信奉し、つねに学派間の偏見を多く有していた。^③今は幸いにやや衰え、「それら書物は」ただ古代のことを考察するために用いるだけである。

生物学者はここ百年來はじめて現れ、最も著名なものはいギリス人であるダーウィン (Darwin) の『種の起源 (Origin of Species)』である。^④その説は現代の生物と地層中の化石とを考察し、一つ一つ詳しく分析し、その時勢に順応して変化していったことを観察することによって、物と物との間の転変の原因を探るものである。

古い説によれば人間の誕生は神によつて創造されたものであり、今の説によれば人間の誕生は自然の進化によるもので

ある。その説は水と火のように互いに相容れない。この二説については、もしその帰趨^⑥を追究しようとすれば、専門の学問があるべきで、本書で論及する余裕はない。本書がはじめにこれに言及したのは、歴史を議論する場合、ほとんど宗教に関わらないことはなく、古代史はそれがとりわけ顕著だからである。ゆえに先にこれを提起して学者に告げるのであり、区別がなされ選択がなされることを願う。

訳注

(1) 原文は「伝疑時代」。「伝疑」は『春秋』之義、信以伝信、疑以伝疑〔穀梁伝〕桓公五年〕に拠る。後文に見える「伝説」期の原文も「伝疑」である。

(2) 原文は「神洲」。

(3) 原文は「每多入主出奴之意」。「入主出奴」は「其言道德仁義者、不入於楊、則入於墨。不入於老、則入於仏。入於彼、必出於此。入者主之、出者奴之」(韓愈「原道」)に拠る。

(4) 原文は「達爾文之種源論」。ダーウィン (Darwin, Charles Robert 一八〇九—一八八二年)、イギリスの博物学者、地質学者で進化論者。一八五九年、『種の起源』を刊行して生物進化の事実を提示し、自然淘汰説を樹立。当時、この書はまだ中国で翻訳されていなかったが、嚴復「原強」(一八九五年)や梁啓超「天演学初祖達爾文之学説及其略伝」(『新民叢報』第三号、一九〇二年)等によって紹介がなされていた。

(5) 原文は「觀其會通」。「聖人有以見天下之動、而觀其會通、以行其典禮」(『易』繫辭伝上)に拠る。この句の孔穎達疏には「觀看其物之會合變通」と見える。

(6) 原文は「指帰」。

第二節 地の各州、人の各種

大陸は五つの州に分けられる。我々が住んでいるのはアジア州 (Asia) という。その西はヨーロッパ州 (Europe) という。その西南はアフリカ州 (Africa) という。そのさらに西は南北アメリカ州 (South and North America) という。アジア州の東南はオーストラリア州 (Australia) という。これらは五大州であり、その名はみなヨーロッパ人がつけたものである¹⁾。

この五州に住んでいる種族は、アジア州にいるものはモンゴリアン種 (Mongolians) という。アジア州の南の諸島にいるものはマレー種 (Malays) という。ヨーロッパ州にいるものはコーカソイド種 (Caucasians) という。アフリカ州にいるものはネグロ種 (Negros) という。アメリカ州にいるのはインディアン種 (Indians) という。これを五種²⁾とい、その名もまたみなヨーロッパ人がつけたものである³⁾。この五州、五種と互いに交渉し、しかも信じるに足る歴史を伝

えているのは、ヨーロッパ人に始まるので、ゆえに極東³⁾のものが州名と種名をいう場合、ヨーロッパ人がつけた名称を用いざるを得ないのである)。

この諸々の種の人々は、古代にはアジア西北の高原におよそ集まって暮らしていたが、その後、散りぢりになって四方に分かれ、風土が異なり、生活も異なったため、長い時間を経て、ついに容貌の違い、文化の違いを有するにいたった。しかし、その言語・文字のなかには、なお同じものがあり、ぶつかっては変化してきたのであり、これよりその離合の跡を観察するのは、今日の新たな科学である⁴⁾。

中国はアジア州の東に位置し、モンゴリアン族に属す(案ずるに、アジアはもともとアジア州西側の一つの小さな地であり、かつモンゴルもまた胡人の一支族の名称であるので、これによって中国を概括するにはほとんど足りない。ヨーロッパ人が云々しているのは、一部の偏った事例から無理やり全体を概括した例である)。この族の歴史が我が国の歴史であり、本書が述べるのはこれである。

(1) マテオ・リッチ以来の中国における「亜細亜」概念の受容と清末教科書中における意味の転換については、黄東蘭「中国における「亜細亜」概念の受容」(『東アジア近代史』第一一号、二〇〇八年)参照。

(2) ブルーメンバッツハの学説を指す。ブルーメンバッツハ(Blumenbach, Johann Friedrich 一七五二—一八四〇年)、ドイツの医学者、人類学者。人類の一元性を強調し、人類の相異は、人間固有の性質が風土、遺伝等の諸要素により身体的、文化的に種々の段階にあるにすぎないとした。系統的頭蓋学の分野を開拓し、コーカサス人種を祖型とし、人類をコーカサス、モンゴル、エチオピア、アメリカ、マレーの五人種に分類した。中国では一八九二年に宣教師ジョン・フライヤーが編纂した中国最初の科学雑誌『格致彙編』に「人分五類説」がイラスト入りで紹介されたことで、この説が知識人のなかで広まっていったという。坂元ひろ子「中国史上の人種概念をめぐって」(竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて—』、人文書院、二〇〇五年)、一九二頁。

(3) 原文は「秦東」。

(4) リヒトホーフエンの学説を指すか。リヒトホーフエン(Richtofen, Ferdinand Freiherr von 一八三三—一九〇五年)、ドイツの地理学者、科学探検家。プロイセンの東アジア使節団に随行、中国の各地を調査旅行した。主著は『支那』七卷(一八七七一—一九一一年)等。中国の文化的・人種の起源について、西方起源説(後述)を拒み、それをタリム河西方(現在の新疆ウイグル族自治区)とする中央アジア起源説を唱えた。

夏曾佑も、次節「中国種族の起源」中に見える通り、漢族の西方起源説を否定している。なお、桑原隲藏もリヒトホーフエンの説を支持し、漢族が太古に「西北方」より移住してきたと述べている。桑原隲藏「支那の太古に関する東洋学者の所説に就き」(一八九六年、今『桑原隲藏全集』第一卷、岩波書店、一九六八年)、一三五—一三六頁、同『中等東洋史』上卷(大日本図書、一八九八年)、二二頁。

第三節 中国種族の起源

種には必ず名前があるが、わが族の名はいたって定めがたく、今日の人々はみな支那と称する。案ずるに、支那という呼称は、インドに生じ、その意味は辺境の地のようである。これはヨーロッパ人がモンゴルでもって我が種を概括するのと同じであり、いずれも定まった名称とすることはできない。漢族と称することについては、匈奴と通じてはじめてその名を得た。唐族と称するのは、海外に通じてはじめてその名を得た。その実、これらはみな王朝名であり、国名ではない。諸夏という呼称はより古いものであるが、しかしこれもまた王朝名であり、国名ではない。⁽¹⁾ ただ『左伝』襄公十四年に、戎子駒支の言葉を引用して、「我が諸戎は飲食衣服、華と同じからず」と述べられており、華は王朝名ではない。⁽²⁾ あるいはこれがわが族の真の名称であろうか。⁽³⁾

わが族の由来に至つては、ますます定説がない。近年人がいうところでは、我が族はバビロンから遷つてきたといふ^①。下に示した、最近、西暦一八七〇年代以降、フランス、ドイツ、アメリカの各人が何度もバビロン遺跡の発掘地で発見した証拠から見れば、古代バビロン人とヨーロッパ人の文化は近いが、我が族の文化とは遠く、おそらくは同種ではない。この古いことがらについては、うしろに付録しておく。

〔後文省略〕

訳注

- (1) 「諸夏」については、梁啓超の一文に「中華建国、実始夏后。古代称黄族為華夏、為諸夏、皆紀念禹之功德、而用其名以代表国民也」と見える。中国之新民（梁啓超）「論中国学術思想變遷之大勢」（『新民叢報』第三号、一九〇二年）。
- (2) 「我諸戎飲食衣服、不与華同、贄幣不通、言語不達、何悪之能為」（『左伝』襄公十四年）に拠る。晋の范宣子から機密漏洩の嫌疑をかけられた戎子駒支による弁明の言。
- (3) 中国の国名、種族名については、つとに黄遵憲が「考地球各国、若英吉利、若法蘭西、皆有全国総名、独中国無之。西北各藩称曰漢、東南諸島称曰唐、日本亦曰唐、或曰南京、南京謂明。此沿襲一代之称、不足以概歷代也。印度人称曰震旦、或曰支那、日本亦称曰支那、英吉利人称曰差那、法蘭西人称曰差能。此又他国重訳之音、並非我国本有之名也。近世対外人称、毎曰中華。

東西人頗譏彈之、謂環球万国各自居中、且華我夷人、不無自尊卑人之意」云々と述べている。黄遵憲『日本国志』（一八九八年）、卷四、鄰交志一。

また、梁啓超も「吾人所最慚愧者、莫如我国無国名之一事。尋常通称、或曰諸夏、或曰漢人、或曰唐人、皆朝名也。外人所称、或曰震旦、或曰支那、皆非我所自命之名也。〔中略〕曰中国、曰中華、又未免自尊自大、貽譏旁觀。雖然、以一姓之朝代而汚我国民、不可也。以外人之假定而誣我国民、猶之不可也。於三者俱失之中、万無得已、仍用吾人口頭所習慣者、称之曰中国史」と述べている。前掲任公（梁啓超）「中国史叙論」。

- (4) ラクペリが提起したいわゆる漢族西方起源説を指す。ラクペリ (Lacouperie, Albert Etienne Jean Baptiste Terrien de 一八四五—一九四年)、イギリス（フランス生まれ）の東洋学者。その著『中国古文明西方起源論』（一八九二年）で、中国の上代文明がバビロニア方面に起源することを論じ、学界に大きな問題を提起した。この学説の、明治日本を媒介とした、中国における流布については、石川禎浩「二〇世紀初頭中国における黄帝熱・排滿・肖像・西方起源説」（『二十世紀研究』第三号、二〇〇二年）に詳しい。この当時、蒋智由「中国人種攷」（『新民叢報』第三七期、一九〇三年）、陶成章「中国民族権力消長論」（一九〇四年）がラクペリ説を支持していたといふ。

第四節 古今の時代変化のあらまし^①

中国の歴史は三大時期に分けることができる。未開から周末までが上古の時代である。秦から唐までが中古の時代である。宋から今日までが近古の時代である。^②

もしさらにこれを区分し、世の移ろいとびったりと合致することを求めるならば、上古時代は二期に分けることができる。開闢から周初までが伝説期である。この時期の事柄は全く信じるに足る歴史がなく、すべて経書と諸子のなかにこれを見ることのできるが（経書、史書、子書をいかに分けるかはのちに詳述する）、往々にして寓話と事実が混ざり合っており二つに分けることができず、読者は各自が慣れ親しんでいるものを信じているだけである。ゆえに伝説期という。

周の中葉から戦国までは育成期である。⁽³⁾ 中国の文化はこの時期に形づくられ、この時期の学問は中国の頂点に達し、のちの世の人はその諸学派のなかの一部を實行し、それによってそれぞれ利益と損害を受けたに過ぎない。ゆえに育成期という。

中古時代は三期に分けることができる。秦から三国までは極盛期である。この時期、中国では人材が輩出し、国力が極めて強く、およそ戦争はいずれも同じ種のもので戦い、別の種のもので宮廷に跪いた。⁽⁴⁾ これは第二期の人の理想を實行して、良い結果を得たからである。ゆえに極盛期という。

晋から隋までは中衰期である。この時期は異民族が侵入し、政権を掌握し、宗教もまた大いに外来宗教による変化を

被った。ゆえに中衰期という。

唐朝一代は復興期で、⁽⁶⁾ この時期、国力の強さはほぼ漢代と等しく、風俗は及ばなかったが、しかしのちの王朝には勝った。ゆえに復興期という。

近古時代は二期に分けることができる。五代、宋、元、明は退化期である。この時期、学問は荒廢し、風俗は衰退し、兵力、財力は次第に衰え、徐々に独立できない様相が現れてきたからである。これは第二期の人の理想に付会して得た悪い結果である。ゆえに退化期という。

本朝の二百六十一年間には変革期である。⁽⁷⁾ この時期の前半は、学問、政治が秦以来のものを集大成し、後半は世情と人心が、秦以来、未曾有のものとなった。これは思うに、秦人が成功した局面がすぐに行き詰まり、ちょうど新しい局面に入ろうとしているところに位置している。ゆえに変革期という。

これが中国史の大略である。⁽⁸⁾

訳注

(1) 原文は「古今世変之大概」。

(2) 原文は「草昧」「天造草昧」(『易』屯)に拠る。

(3) 原文は「化成之期」。「化成」は教化が成功すること。「聖人

久於其道、而天下化成」(『易』恒)に拠る。

(4) 原文は「稽顙」。古代における跪拜の礼。「弔者致命、主人哭拜、稽顙成踊」(『儀礼』士喪礼)に拠る。

(5) 上古時代第二期を指すであろう。

(6) 原文は「復盛期」。

(7) 原文は「更化期」。「為政而不行、甚者必變而更化之、乃可理也」(『漢書』礼楽志)に拠る。

(8) 時代区分について、那珂通世『支那通史』では、「今図編述之便、仮分古今為三大紀。自唐虞三代至六国并於秦、二千余年、是為上世。自秦歷漢唐至宋金之衰、千四百余年、是為中世。自元初歷明至今、六百八十年、是為近世」と見える。同書巻之一(中央堂、一八九〇年)、六頁。

桑原隲藏『中等東洋史』では、「今姑く支那本部の大勢を中心とし、之と関係せる周圍諸邦国の興亡、諸民族の盛衰に參考して、東洋史の時代を、左の四期に分つべし。(第一)上古期 漢族膨張時代 太古より秦の一統に至る間をいふ。此間に在りて、東洋史中一切の事變に於て、最も重要な位置を占むべき漢族は、支那北部の地に抛り、三皇五帝三代を経て、中央集權の基礎漸く固く、遂に秦の始皇帝出でて、始めて鞏固なる一統政治を建てたり。(中略)故に、姑く之を漢族膨張時代といふべし。(第二)中古期 漢族優勢時代 秦の一統より唐の滅亡に至る、凡そ千百年間をいふ。(中略)漢族は、秦兩漢時代に於て、優に塞外諸族を圧倒し、五胡十六国の際と雖ども、尚よく之と頡頏し、隋唐時代に至りては、復又空前の大版圖を開きしが故に、此間を漢族優勢時代といふも、大不可なきもの、如し。(第三)近古期 蒙古族全盛時代 五代より清朝の興起に至る、凡そ七百年間を指す。此世紀に於て、漢族の氣焰全く沈降し、塞外諸族は次第に勢を得、(中略)故に此世紀を蒙古族

最盛時代といふべし。(第四)近世期 歐人東漸時代 清初より現時に至る、凡そ三百年間、之を歐人東漸時代と云ふべし。前世紀の終より、歐洲人士の東洋に遠航する者漸く多く、(中略)此の如くして阿利安人種は、次第に東方亜細亜の大勢を左右するに至れり」と見える。前掲桑原隲藏『中等東洋史』上巻、一八一―二頁。

これより、夏曾佑『中国歴史』の時代区分が桑原『中等東洋史』のそれとほぼ一致していることを見て取れる。また、桑原が民族の興亡の視点から時代を区分しているのと同様に、夏曾佑もまた主に中国の異民族に対する国力の強弱から時代を区分している。しかし、夏曾佑が時代の小区分まで行う点でより詳しく、また一貫して中国を主体としている点で異なっている。

なお、この当時、梁啓超が提起した中国史の時代区分には、「第一上世史、自黄帝以迄秦之一統、是為中国之中国、即中国民族自發達自争競自團結之時代也。(中略)第二中世史、自秦一統後至清代乾隆之末年、是為亞洲之中国、即中国民族与亞洲各民族交涉競爭最烈之時代也。又中央集權之制度、日就完整、君主專制政体全盛之時代也。(中略)第三近世史、自乾隆末年以至於今日、是為世界之中国、即中国民族合同全亞洲民族与西人交涉競爭之時代也。又君主專制政体漸就湮滅、而數千年未經發達之國民立憲政体、將嬗代興起之時代也。此時代今初萌芽、雖閱時甚短、其内外之變動、實皆為二千年所未有、故不得不自別為一時代、實則近世史者、不過將來史之楔子而已」と見え、夏曾佑のそれと少なからず異なる。前掲任公(梁啓超)『中国史叙論』。

第五節 歴史の益

我が国六千年の国史を読むと、人をして悲喜きわまりなく、考え込んで我を忘れさせるものがある。

上古の歴史を読むと、いたって高尚で奥深い理想（たとえば『易』がそうである）、いたって綿密な政治（たとえば『周礼』がそうである）、いたって純粋な倫理（たとえば孔教がそうである）が見え、燦然として大いに備わり、エジプト、カルデア、インド、ギリシアと比べても恥じるところがない。

中古の歴史を読むと、国力が強大で、次第に兵力を用い、閩、粵、滇、黔、越南の地を併合して一国とし、北は大砂漠を横切り、西はパミール高原に至り、ぬきんでた存在としてアジアの中心をなし、ローマ、匈奴の強盛とほとんど異なるところがない。これは思いをめぐらすだけで人をして喜び勇ませるものである。

近古から今日までの歴史を読むと、五代の間は、雇われ商人や下級役人、沙陀族や契丹族が好き勝手に食い争い、士族は塗炭の苦しみを味わい、文物は地をはらい、滅亡しない種族はほとんど稀であった。宋が建国され、いくらか世が治まったと称することができるようになったが、活力が損なわ

れ、すぐには起き上がることができず、しかも国家を治療するものはその任にふさわしいものでなかった。これ以来、中国は外に対しては優柔を主とし、内に対しては圧制を主とし、士人は読書せず、兵士は命令に従わず、名目と実際はくいちがいが、主人と客人は逆転し、天下は愁い嘆き、どこからこうなったのかもわからない。まさにエジプト、インドの覆轍を踏もうとしているのではないか。これは人をしてがっかりと意気消沈させるものである。

とはいえ、本朝の二百余年間の歴史を見ると、道光年間以前は、政治、風俗は宋明の旧制にしたがっていたが、学問はすでに宋明から離れ、漢唐時代と符合していた。道光年間以後は、世界とあいまみえ、この数十年來は、急速に戦国の勢いを呈している。ここに識者は国家の命運がまさに一変しようとしていることがわかったのであるが、まだ無限の望みがないわけではない。

歴史を読む人は、必ずやその歴史の中で述べられていることを十分に理解し、ひるがえってそれをわが身で受けとめ、⁽¹⁾ そうしてはじめて歴史を読むことが有益となるのである。概略は以上の通りである。

訳注

- (1) 原文は「俯仰自失」。
(2) 原文は「慵販、皂隸」。
(3) 原文は「狂噬交搾」。
(4) 原文は「引婦身受」。「身受」は「口得所嗜、目得所美、身受其利」(「史記」亀策列伝)に拠る。

二、夏曾佑「中日離合の関係を論ず」

中日離合の関係を論ず⁽¹⁾

天下には自然の勢いがあり、これは人の力によって逃れられるものではない。往往にして何千何百年の悠久の時を経て、神々しい光が集まっては離れ、盛衰興亡きわまりない⁽²⁾が、その最後たるや、やはり自然の勢いへと帰っていく。これは天の定めから逃れられないことを悲しみ嘆くゆえんである。

我われと日本とはおそらく古くから互いのことを知っている。「和は三韓の大海中に在り」⁽³⁾。その文は『山海経』に見ることができ⁽⁴⁾。これは四千年前の著作であり、その時、我われはすでに日本があることを知っていたのである。秦漢の際

には、三神山の説が、日々君主の心中に去来し、これを説くものはそれが日本であると考えた。顧みるに、日本と我われとの交流は、信じるに足る歴史があるのは、三国の魏に始まる⁽⁵⁾。魏より以後は、隋代、唐代にあつて、往来が途絶えることはなく、その交流の足跡はしだいに密になっていった。しかしこれらはいわゆる国交ではなく、国交は明代に始まった。朝鮮出兵の際には、軍隊があいまみえたが、徳川氏が幕府を開くと、たちまちに平和が訪れた。徐福が男兒女兒を船に乗せて海に入つてから、徳川氏と明との講和に至るまで、その間二千年、我われと日本とはあるときは和しあるときは戦つたけれども、いずれにせよ世界に直接関係することはなかった⁽⁶⁾。

世界に關係することになるのは、甲申事変にその兆しが現れ、日清戦争にそれが成るのであり、終始、朝鮮と密接に關わつた。日清戦争に際しては、我われはもとよりこの戦役が引き起こす事態の大きさがわかつていなかった。思うに日本もまた必ずしもその結末を予測できていなかったであろう。その結末たるや、ついにロシアがドイツ、フランスを引き込んで結集し、日本の腕をねじあげて「戦果を」奪いとつたのだつた。「こうして」ロシアは旅順を併呑し、ドイツは報い

がなかったので、膠州湾を獲得し、イギリス、フランスはつぎつぎとそれぞれ對抗策をはかった。丙申から丁酉(一八九六年から九七年)までの間は、とうとう騒然として一日として穏やかに過ごすことができなくなった。また、ちょうど宮廷内には災いが重なり、皇帝¹¹は内心不安となり、眼前の患いから救い出す方法を講じるものは、禁中で二派に分かれた。一つは守旧派であり、一つは革新派であった¹²。そして、執政者のあいだでもまた二派に分かれた。一つは連露派であり、一つは親日派であった。

皇帝のそれとなく示された意向は、新旧のいずれかに取るものではなく、また露日のいずれかに分かれるものでもなかった。しかし、それぞれの派が皇帝をとりこもうとした結果、波乱が生じ、時間の経過とともにますます議論が高まり、一に戊戌(一八九八年)の維新運動に発展し、二に戊戌のクーデターに発展し、三に己亥(一八九九年)の建儲¹³に発展し、四に庚子(一九〇〇年)の義和団事変に発展し、五に辛丑(一九〇一年)の皇帝帰還¹⁷に発展し、六に癸卯(一九〇三年)のロシアとの密約¹⁸に発展し、最終的に甲辰(一九〇四年)の露日開戦へと至るのである。災難の到来は、天にとどくほどあふればびこるに至ったが、その根本に遡るならば、

原点はただ二つである。一つは皇室の伸たがいであり、一つは中日の離合である。しかし、皇室の見解は、また時に中日の離合と関係していた。

試みに日清戦後を見てみるならば、ロシア人が間隙に乗り、籠絡をはかり、今は亡き宰相は老いばれ、「(ロシアに)愚弄されてしまい、中日の交わりはほとんど切り離されてしまった。しかし、戊戌に至るや、皇帝は親政を行い、そこで日本との提携をはかることを決した。「ところが」西太后による垂簾聴政におよぶや、政策は一変し、日本と提携しないだけでなく、ロシアとの交わりもまたそれに専念したわけではなかった。庚子に至ると、一切の外国勢力の排除をはかった。皇帝帰還後は、すべてにおいてなよなよと媚びることに慣れてしまい、ロシアに頼ろうとする思いがないわけではなかったが、どうしようもないことにはロシア人の機会がすでに熟してしまい、彼らはもはや人目をはばかることなく、突如として正体を表して我われに対峙してきた。ここに我われははじめてロシアを恐れること阿修羅や夜叉をも凌駕し、悪い鬼²¹とは必ずや親しむことができなことがわかったのである。わたしは確かに、近ごろ大臣のなかで、ロシア重視の者が日々減り、日本重視の者が日々増え、政策がすでに四度目

の変化にあることを知っている。いったい国家の政策の混乱は、この十年間より甚だしいものはなかった。引き続き今後は、政策が一定することは可能であろうか。

わたしがかつてこれを論じたことには、東方大陸の諸国には一つの特例があり、それは世界にないものであった。その例とは、文明的な民族は必ず野蛮な民族にかなわない、ということである。北方に起こった民族は、必ずや南方にあって君主となった。支那²²⁾、インドは古くからこのように、髪が天をつき、まなじりが裂けるほど憤ってみても、どうしようもなかったのである²³⁾。しかし、日本だけがこの例に陥らなかつた。たいへん大きな出来事であったのは、北条氏が胡族である元を拒んだことであつた。元人の力はアジアをあまねくおおい、白人種であつても恐れるところであつた。しかし、日本だけが独力でこれを拒んだのである。これより古人の文化を保存することができ、胡馬の蹂躪するところとならなかつた。その功績は、ギリシャがペルシヤを拒み、フランス人がイスラム教を拒んだことにも比肩しよう²⁴⁾。

こうして、今日ロシアを拒むことは、元を拒んだことの結果であり、アジアとヨーロッパの榮落、黄色人種と白人種の興亡、専制と立憲の強弱は、ことごとくその決着をここに取

るのである。我が中国は、僭越ながらアジアの大国であり、我われはもとより我が民の意を決することができる。たとえはなはだ不肖であつても、必ずやこのようには取えて言うまい。すなわち、「我われはヨーロッパが興隆し、アジアが敗れるのを願う。我われは白人種が増長し、黄色人種が減ぶことを願う。我われは我が身を苦しめ搾取する専制政体が日々盛んとなり、我が身を安樂にする立憲政体が日々亡んでいくことを願う」と。そもそも我われがすでに奴隸や牛馬の地位に自らの身を処することを欲さない以上、この存亡の危機一髪の事態に際し²⁵⁾、必ずや我われと利害を同じくする者と行動を共にし、そうしたのちに事を成しうることや明らかである。これはいわゆる天の定めであつて逃れられないものであるうかならうか。

そもそも、これは決して盲従迷信することを言っているのではない。もし我われが事情もわからず、以前ロシアにたよつていたのと同じように日本にたより、何もせずに命をゆだね、一切客のなすままにしてしまうのであれば、自らを害するだけでなく、また客をもわずらわすことになる。思うに、天下が中国のものはや助けられないことを鑑みた場合も、それでも日本が独り中国を呑み込んでしまうことは欲せず、

ここに中国分割の説が定まるのである。⁽²⁶⁾「しかし」支那が分割されれば、日本は孤立するのであり、むろん支那が強くなって、日本と並び立つことのほうがより計を得ているのである。ゆえに、中日のあいだで考慮すべきものは、もとよりロシアによる攻撃やロシアが敗色を呈するのを待つ必要はなく、天理人情の交わりにこれを決することができる。⁽²⁷⁾このようであれば、大事などころはすでに明らかであり、のちの政策はここから始まるのである。

訳注

- (1) 原文は「論中日分合之關係」。
- (2) 原文は「神光離合、起伏万端」。「神光離合」は「徙倚傍徨、神光離合」(曹植「洛神賦」)に拠る。
- (3) 原文は「和在三韓大海中」。夏曾佑「中国歴史」第二冊、第五九節 日本には、「倭在三韓大海中(此「山海経」文)」と見える。前掲楊琥編『夏曾佑集』下、一〇〇〇頁。
- (4) 『山海経』海内北経に「蓋国在鉅燕南、倭北。倭属燕」と見え、この句の郭璞伝に「倭国在带方東大海内」と見える。
- (5) 『史記』始皇本紀に見える。
- (6) いわゆる「魏志倭人伝」のこと。
- (7) 原文は「高麗之争」。
- (8) 原文は「均無当於天下之故」。「天下之故」は「易、無思也、無為也、寂然不動、感而遂通天下之故」(『易』繫辞上伝)に拠る。

る。この句の孔穎達疏に「故、謂事故、言通天下万事也」と見える。

- (9) 原文は「高麗」。
- (10) 原文は「甲午之戰」。
- (11) 原文は「乘輿」。
- (12) 原文は「一為法祖、一為開新」。
- (13) 原文は「微旨」。
- (14) 原文は「挾持」。
- (15) 端郡王載漪の子溥儀を皇太子に擁立したことを指す。
- (16) 原文は「庚子排外之局」。
- (17) 原文は「辛丑回鑾之局」、八か国連合軍に北京を占領され、光緒帝を伴い西安に逃れた西太后は、北京議定書の締結後、北京に戻った。
- (18) 一九〇三年四月一八日にロシアが満洲第二期撤兵問題をめぐって中国外務部に提出した新たな七項目の要求を指す。これ以降中国で拒俄運動が急速に高揚した。
- (19) 原文は「故相」。李鴻章を指す。
- (20) 原文は「泊乎訓政」。
- (21) 原文は「羅刹」。ロシアを指す。
- (22) 原文も「支那」。以下、「支那」と「中国」の語が混在するが原文に従った。
- (23) 原文は「髮指皆裂、末如何也」。
- (24) それぞれ、ペルシア戦争(前五〇〇―前四四九年)、トゥール・ポワティエ間の戦い(七三三年)を指す。
- (25) 原文は「当此存亡一髮之係」。「一髮」は「一髮千鈞」のこと。「夫以一縷之任、係千鈞之重、上懸無極之高、下垂不測之淵、雖甚愚之人、猶知哀其將絶也」(『漢書』枚乘伝)に拠る。
- (26) 原文は「於是瓜分之說斯定」。

(27) 原文は「有可決之於天理人情之際者矣」。
(28) 原文は「宗旨」。

追記

本稿の脱稿後に近藤孝弘編『歴史教育の比較史』（名古屋
大学出版会、二〇二〇年）を目にしえた。なかでも岡本隆司
氏の執筆にかかる第一章が中国史上における歴史・教育、教
科書・テキストのありかたを俯瞰し、夏曾佑『中国歴史』に
ついても、中国人の手になる歴史教科書の嚆矢として、踏み
込んだ検討を行っている。併せて参照されたい。

(つちや ひろし 名古屋大学大学院人文科学研究科准教授
しん いくらん 同大学同研究科博士前期課程学生
そう しんじゆん 同右
ちよう ぶんぶん 同右
きし ふみな 同大学文学部学生
しほ あかね 同右)